

丸眼鏡

渋谷教育学園渋谷中学校 1年 福政 武

私は一個、奇妙な丸眼鏡を持っている。最近ではマスクをしているから、眼鏡の先端とマスクの紐の両方を耳にかけなければならぬ。すると不思議なことに、丸眼鏡がマスクと争い始め、その細長い紐を切ろうとする。そして最後には丸眼鏡が勝ち、マスクの紐をぶつりーというのは冗談だと言いたいところだが、それが本当なのである。

その眼鏡を買った、いや入手したのは、一昨年の秋だった。以前まで使っていた眼鏡に飽きて新しいのを買おうと、行ったこともない一軒の店に入った。店主にいい眼鏡があるか聞くと、こう言った。「眼鏡をお探しのならば、おすすめがあります。ほらこれ、丸眼鏡です。売っているのではなく、父からもらったんですよ。ただ今はもう使っていないんです。ただで差し上げますので、良ければ使ってみてください。」こういう時はもらわないと悪い気がしたので、もらってしまった。

その二者の争いは両耳で発生するのだ。マスクをしている間はたいてい耳の上で争っているものだから、突然マスクが落下する時だつてしよちゆうある。それが職場なんかだと皆に「何あの人」と疑われるのだから、思わず丸眼鏡を外してやりたくなる。

そんな眼鏡はかけない方が良いと思うだろう。しかしそうもいかない。そもそも私はかなりの近視であり、小さな字なんかほほ点にしか見えない。歩いている時は道なんかもよく見えない。だがこの眼鏡さえあれば、そんなものがおそろしいほどはつきり見えるようになる。これほど優秀な性能のものなんて探してもなかなか見つけれられない。だから今ではとても愛用している。とはいえ、マスクの腕を切りたがる性格は気に入らない。そこが玉に瑕、というわけなのだ。

そいつと仲良くするのは難しかった。マスクをつけてから数分経つと、その長い腕でカシカシ切り始める。一方で、負けず嫌いのマスクはできる限り踏ん張る。しかし丸眼鏡の力にはかなわず、敗北。その繰り返しだ。切られる前に救おうと、私がマスクを外そうとすると、逆にその反動でぶつり。紐をテープで巻いて切れにくくしようとしても、結局ぶつり。もうどうしようもなかった。鉢の良し悪しによって育ちが変わる植物だつている。切るものによつて切れ味が変わってしまうハサミだつてある。どのようなものにも相性というものがあるということ、改めて感じさせられるのであった。

そういえば、なぜ眼鏡やマスクは耳にかけて使うのだろうか—しばしばこう思うことがある。ある時、私は何としてもマスクを救う方法を見つけたかったので、紐をあらかじめ取り、両面テープでマスクの中央の広い部分を固定することにした。よく見れば他の人から不自然だと思われるかもしれないが、一見ただの紙マスクである。その上、丸眼鏡との争いが起こることもないから、二者にとつてベストの方法だった。「人間に聴覚があつたとしても、もし耳のよ

うな出っ張ったものが顔の横の位置に付いていなかったのなら、我々は眼鏡やマスクを使用する時どうしていたのだろう」そんなことを考えているうちに、運良くこの方法を思いついた。だが、この方法ではテープをはがすと肌がかぶれたので、残念なことに、今後活用することができずに終わった。

どれだけ切つても丸眼鏡は飽きない。ただ何も考えないで次々に紐を切る。こうなることは知っているのだが、やはり私自身、眼鏡をつけなくてはならない。丸眼鏡、マスク、私の耳といった三角関係がそこには成り立っていたのだ。

ひどい時なんかは横断歩道の真ん中で切れる。そんな時は、周りの人から警戒されたくないで、落下する前に、マスクを手の平で押さえる。しかし、今にもくしゃみをしそうな不自然すぎるそのポーズが、余計に警戒されることになってしまう。

どのマスク達も、初めに攻撃されたときは自分も対抗しようと相手の腕を切ろうとする。だがしだいに「こいつには勝てないな」と諦めていくらしい。だからあらかじめ、私からマスク達には遠回しに伝えておく。「丸眼鏡には気をつけろ」と。それでももちろん結果は変わらない。これでは困る。外なんか安心して歩いてもいられないじゃないか。あの六十枚入りのマスクの箱を週に一回、わざわざ店まで買いに歩いて行くというのも、もうこりこりだった。値段は安いのだが、あんなに遠いところまで歩くのが大変なのだ。そして何より、その歩き途中でもマスクがぶつりと切れる。

今まで使用したことのない種類のものを買ったこともある。だがそれでも全て失敗した。こうして丸眼鏡にマスクを切られていく生活が、しばらく続いた。

ある時、思い切つて、親友から誕生日プレゼントとしてもらった布地のマスクを身に付けていくことにした。そしてまたしてもやられてしまうーと思いきや、丸眼鏡は紐を切らなかつた。切ろうとしたものの、いつもと違ったためか、どうやら気に入らなかつたらしい。まさかこの眼鏡に好みがあつたとは。とにかく、それを知つたことでようやく安堵したのである。